

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 10 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21500261

研究課題名（和文）ディスコースにおける概念化と言語化の認知言語学的考察  
-エモーションの役割研究課題名（英文）Cognitive Linguistic Study on Conceptualization and Linguistic  
Expression in Discourse---The Role of Emotion

研究代表者

宮浦 國江 (MIYAURA KUNIE)

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：50275111

研究成果の概要（和文）：認知語用論の理論構築と実証的研究を進める中で、知識構造としてのストーリー、言語使用場面では、複数解釈可能性を示すマルチ・ストーリー・モデルの有効性が明らかになった。記号体系の一部としてストーリーを捉えることで、形態論、統語論との連続性が確認された。接辞-*ish*, -*like* などの分析をベースに、メタファ、メトニミ研究の陰に隠れがちなシミリに注目し、参照点構造によるレトリック戦略について論ずると共に、形容詞に見られる主観性、客観性を考察した。

研究成果の概要（英文）：In the pursuit of theorization and practical study of cognitive pragmatics, the notion of STORY as knowledge structure was suggested, and the Multi-Story Model in discourse comprehension is shown to be effective. The notion of STORY as a construction makes it possible to analyze pragmatic issues in the same way as morphological and syntactical issues in the Cognitive Grammar paradigm. The study of affixes, such as *-ish*, and *-like*, lead me to pay more attention on simile, which is usually thought to be of less importance than metaphor and metonymy, and discuss its rhetorical strategy in terms of the reference point structure and subjectivity and objectivity in adjectives.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：情報学・認知科学

キーワード：認知言語学・英語学

## 1. 研究開始当初の背景

認知語用論の可能性を探る中で、ディスコースレベルでの言語事象も、認知言語学の基本概念（「ものの捉え方 (construal)」、フレーム知識 (frames)、放射状カテゴリー

(radial categories) など) による分析が有効であり、語彙・句・イディオム・文からディスコースに至るまでの言語体系が統一的に [[SEM]/[PHON]] からなる記号的言語単位 (形式と概念のペアリング。「コンストラクショ

ン (construction)」とも呼ばれる)によって構成され、言語知識はスキーマ的←→特定の、内的単純性←→複雑性の2つの軸にネットワーク的に構成されていること (Langacker 1987, 1990, 2000)が明らかになってきた。即ち、ディスコースも認知言語学的手法により、その重層構造を統一的に解明する可能性が拓かれた。また、Lee (2001)の構築主義的談話分析と、Lakoff (2004)の政治ディスコースを題材としたフレーミング理論の延長線上に、従来の「フレーム」に代わるものとして「マルチ・ストーリー・モデル」の可能性が考えられた。さらには、間投詞の認知語用論的捉え直しの中で、認知と言語に受けるエモーションの役割の重要性が論点となってきた。

## 2. 研究の目的

「認知と言語におけるエモーション」「概念化者と話者の二重役割」「マルチ・ストーリー・モデル」「レトリック戦略」をキーワードに、理論構築と実例分析を行う。「perception(知覚) > conceptualization (概念化) > vocalization (表出)」の基本図式の確認と、それが発話イベント内での諸要因(話者・聞き手等参与者、コンテキスト、レトリック戦略、モニタリング、関連性原理、ポライトネス原理)によって複雑さを増す過程の明確化、知識構造として採用する「マルチ・ストーリー・モデル」の全体像を示すこと、概念化におけるエモーションの役割など認知文法の哲学的基盤の考察が中心となる。これらを具体的言語事象の中で見ていく。

## 3. 研究の方法

認知語用論研究においては、理論構築と実例収集・分析という実証的研究は不可分であるので、実例分析とそれに基づく理論的考察を認知言語学談話会月例研究会で発表し批判を得て考察を深めていき、学会発表や論文という形で公表する。また、概念化における時間的プロセス的要素、肯定的・否定的エモーションなどの根源的問題については、定期的研究会において研究分担者から教示を受けながら、考察を深める。

## 4. 研究成果

21年度には、(i)知識構造としての「マルチ・ストーリー・モデル」を提唱し、日本認知言語学会で英語による研究発表を行った。Langacker (1987 他)が認知文法の枠組で名詞を[THING/X]と捉えているのと同様に、ストーリーをコンストラクション[始まりー展開ー終末/ X]として捉え、さらに放射状カ

テゴリーをなしていることを示して、さまざまなレベルでの概念化と言語化の事例を考察した。特にディスコースレベルでは、いくつかの新聞記事を例に事態の進展と共に解釈が変わる、即ちあるストーリーの一部としての解釈から別のストーリーの一部としての解釈への切り替えがなされる課程を詳細に考察した。このモデルによって brave/reckless などエモーションの関わるレトリック戦略としての語彙選択の問題が説明できることや、相反する諺 (It is sometimes necessary to stretch the truth と The end justifies the means など)の存在が不自然ではないこととして説明できることも示した。さらに(ii)、[X is X is X]のような一見非文と見える「逸脱的」コンストラクションの研究については、認知文法学者ラネカーが[day after day after day]構文と共に論じているため、直接意見交換の機会をもった。局所的支配と大局的支配の関わり方について示唆を得たが今後さらに考察を進めたい。また、典型的文型が必ずしも英語文法を中心ではないという指摘も、記号体系としての文法、コンストラクション文法で、さまざまな言語事象を一元的に説明していく際の重要な指標となった。また、月例研究会では、21年度は、認知文法書の精読とともに、V-ingの品詞論、「繰り上げ」構文の認知文法的分析、味覚表現、色彩語の意味拡張などを考察した。

22年度には、(i)前年度日本認知言語学会で発表したマルチ・ストーリー・モデルについて、ディスコース展開の分析を拡充して精緻化を図った(‘A preliminary note on multi-story model---how we see the world and express it’として『日本認知言語学会論文集』第10巻に発表)。STORYスキーマは、Schank & Abelson (1977)の script theory 同様、知識構造として捉えられているが、分担者宮原は百科辞典的知識の詳細な分析からリゾームの知識構造を示唆した。今後STORYスキーマとリゾーム的知識構造の関係を探究する必要性が生じた。(ii)名詞/動詞同形語については、特に名詞が動詞となる場合 Langacker (2008 等)の認知文法の記述では不十分であり、メタファ・リンク、メトニミ・リンクによる説明の必要性が明らかになった。(iii)接辞-ish, -like, -izedなどの分析をベースに論文「類似性と相違性---XがYのように見える時」をまとめ、認知意味論研究の中でも看過されがちなシミリに焦点をあて参照点構造として考察した。(iv)ディスコース研究に関わり発話行為を認知言語学的に再解釈した。コンテキストと認知について、国際学会 Meaning, Context, and Cognition 2011 (ポーランド、ウッチ大学、2011年3月)に参加し、認知語用論研究者と

の意見交換を行った。(v)認知言語学を英語教育に活かす試みについては、STORY スキーマを活性化させる英語教育の実践(中学2年生対象の授業)、言語単位(construction)をform-meaning pairingとする認知文法の観点からの音声指導のあり方の検討、reading comprehensionとimageryとの関係の考察を行った。

23年度には、(i)「マルチ・ストーリー・モデル」に基づきリーディングにおけるSTORY スキーマ活性化の重要性について論じ、宮浦(2012)にまとめた。また(ii)エモーション表現を収集し、そこに見られるメタファとメトニミの関わりを考察した。HAPPY IS UPに代表的に見られるように肯定的エモーションにはメタファが深く関与している一方、ANGERなどの否定的表現にはHOT FLUID IN A CONTAINERのようなメタファも関与するものの、cold sweat, turn paleなど生理学的徴候によるメトニミ表現が優位を占めることが明らかになった。これらの研究に関連して、形容詞における主観性(subjectivity)、客観性(objectivity)、間主観性(intersubjectivity)の究明が重要な点として浮かんできた。例えば、a bleak winter morningは、概念化の対象に内在する属性(寒く冷たい冬の朝)と、対象のある属性が刺激となって概念化者に生じるある認識(私が寒々しい憂鬱な気持ちになるような冬の朝)とを両極におきその間に位置付けられる概念である。また、形容詞の多くがもつ尺度性は社会的、文化的規範と深く関わるため、今後、間主観性の観点からの考察を進める必要性が明らかになった。(iii)英語教育への応用を考察する中で、音声面、特にプロゾディの重視、マルチ・ストーリー・モデル、ディスコースレベルでのSTORY スキーマ活性化により、一貫した[形式-意味]の記号的文法観での説明が可能であることが明らかとなった。語や複合語レベルでの認識にストレス・パタンが[形式]面で重要な働きを持つように、文レベルでもストレス・パタンとイントネーションが言語単位の[形式]面で重視されなくてはならないことが明らかになった。また、リーディングにおいては、知識構造としてのSTORY スキーマとその具現形が理解に役立つことが示された。

##### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- (1) 宮原勇、主体の解体と自己の探究、中部哲学学会年報、査読有、44巻、2012年、pp. 1-20.

- (2) 宮浦国江、〈書評〉高橋英光著『言葉のしくみ 認知言語学のはなし』、英文学研究和文号 88巻、査読有、2011年、pp. 414-423.
- (3) Kunie Miyaura、A preliminary note on multi-story model---how we see the world and express it、日本認知言語学会論文集、査読有、10巻、2010年、pp. 33-43.
- (4) 宮原勇、認知言語学の哲学的基盤—現象学の立場から—、日本認知言語学会論文集、査読有、10巻、2010年、pp. 631-645.
- (5) Kunie Miyaura、A preliminary note on multi-story model---how we see the world and express it、日本認知言語学会第10回大会 Conference Handbook 2009、10巻、2009年、pp. 119-122.
- (6) 宮原勇、認知言語学の哲学的基盤—現象学の立場から—、日本認知言語学会第10回大会 Conference Handbook 2009、10巻、2009年、pp. 340-343.

[学会発表] (計6件)

- (1) 今井隆夫・宮浦国江、認知言語学と英語学習/教育、日本認知言語学会・認知言語学セミナー、2011年9月16日、奈良教育大学.
- (2) 宮原勇、‘Subjectification’ と ‘Inter- subjectification’ -認知言語学と現象学の交差するところ(1)、京都言語学コロキウム、2011年6月25日、京都大学.
- (3) 宮原勇、Subjectificationについて ---現象学の立場からの考察---、ことば工学研究会 第37会研究会、2011年3月26日、関西大学.
- (4) Isamu Miyahara、Mental lexicon and encyclopedic knowledge、Between East and West: Transcultural Flows of Encyclopedic Knowledge、2010年4月22日、Heidelberg University(Germany). (アイスランド火山噴火により渡航不能、インターネット経由での参加)
- (5) 宮原勇、認知言語学の哲学的基盤---現象学の立場からの考察(招待講演)、日本認知言語学会、2009年9月27日、京都大学.
- (6) 宮浦国江、A preliminary note on multi-story model---how we see the world and express it、日本認知言語学会、2009年9月26日、京都大学.

[図書] (計2件)

- (1) 宮浦国江、「STORYスキーマを活性化させる英語教育」藤田耕司他編著、『最新言語理論を英語教育に活用する』、2012年、開拓社、485頁、pp. 414-423.
- (2) 宮浦国江、「類似性と相似性—XがYのように見える時」安武知子他編著、『ことばとコミュニケーションのフォーラム』、2011年、開拓社、280頁、pp. 184-196.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

宮浦 國江 (MIYAURA KUNIE)  
愛知県立大学・外国語学部・教授  
研究者番号：50275111

### (2) 研究分担者

宮原 勇 (MIYAHARA ISAMU)  
名古屋大学・文学研究科・教授  
研究者番号：90182039